

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 JAPAN TAUNA

新武乃傳末紀

三

13
3270
1



3270
1



好文堂

郭庄遺稿集紀序

秋津湖の風波やゝ文字と喫煙と扇と
酒と手もとぬきあはの海波教り歴代の俗
に義を文字小ぢて唐作を天神の額より
く血がちゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
朝す會話を散せうらうらうらうらうら
後ねもぐり下ふてうらうらうらうらうら
えもふり下極うらうらうらうらうらうら

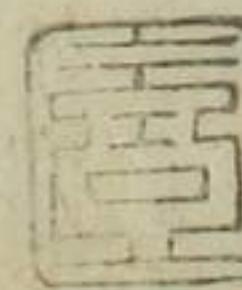
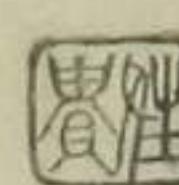
昭和十一年四月三十日購求



はやもとみね松本強きのせなり御嘗ノ
う色を懸をのが様を立切ひをまの民
びゆ活ふみうりあたる卷を舟を立つ船本
を解くえれどとくとくに物を立處みゆ
よもよと御どなむ

理食所別あ松本帖付某造

寛永二年正月孟秋下旬



新氏道傳來記

卷一



目録

諸國敵討

才一

諸々心中乃蟲糞耳れ毒餉
怒釋よりぬ體れさとく

才二

楊うとの秘侍志士
袖うりとくよ上郎乃笠

第三

生兵法の町人乃大班

禍も足を鳥の起た敵人

武久傳本記卷一

説へ心中の盡教身の毒飼

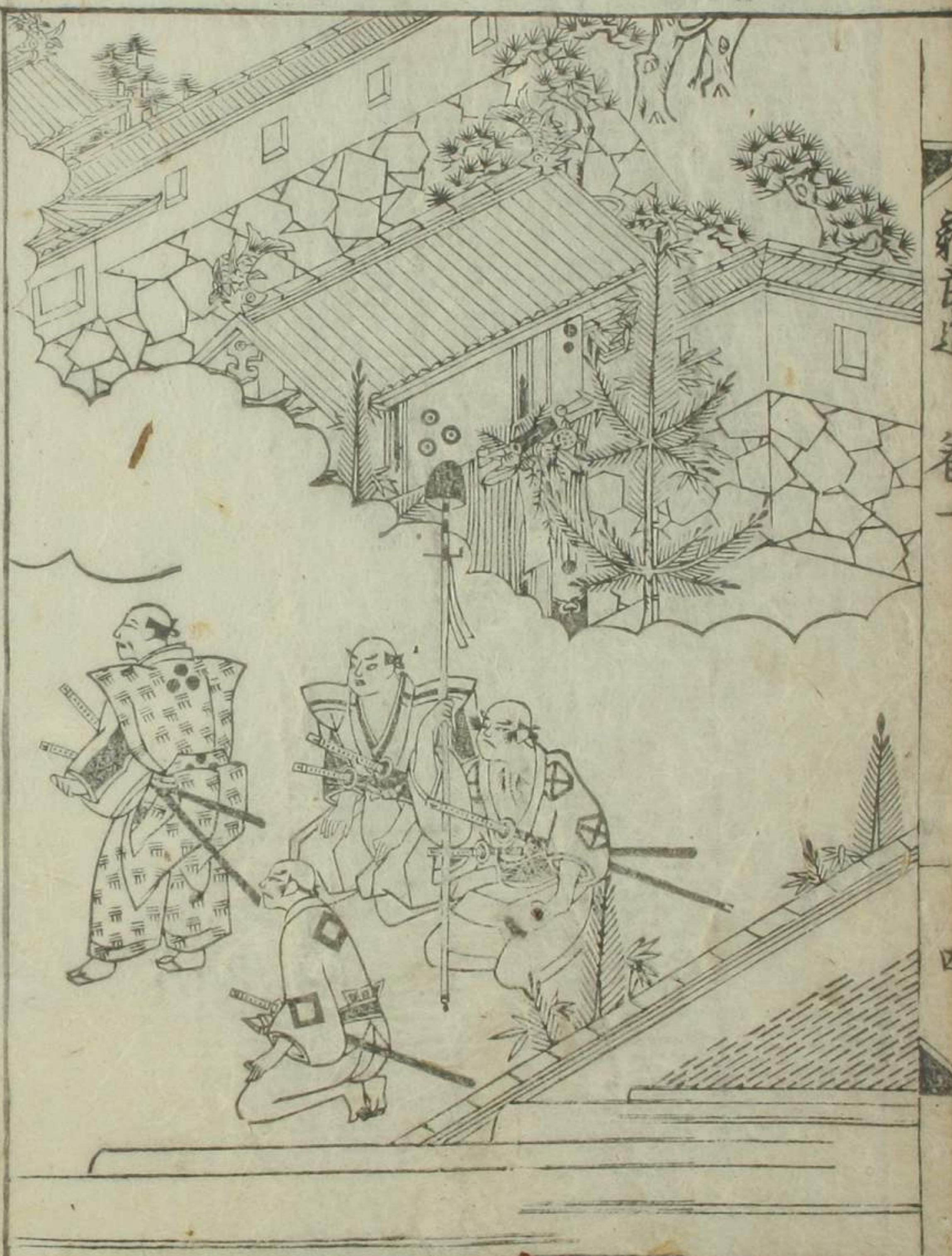
ゆゑに處の幕が累よ引まへて大すれねのあ累れ
掃除もよふげんてらとみ後枝の五代うしり。
よちりお代の坂てもか園もと西の玉太家中に
ひきとよりく城下いりのをよりみどくあがくわ
塙のじきと月とやに葉をくづして川邊と
さな穴ふれをまく今年の若ゑれへ郊。うは
心のわたりたすり不あまで年とをも勧つては居居れ
経りひきゆくがくとらひきゆてそげじり。
業の志ひめのこころうちをりやくねむ窮屈の

下地用じやるのマーアリモトモヤシヒヒトヒキテ
上トの在りわざもそくはくすりやの手とさりく。
年頭の正統法あるまつす。家老用人ヒドウモ。有
中のあざれぬうんざんれあこたす。九五つヒキ
ハはとりへ作ヒテヒムクテ。九四もヒテ
往傍家主ト御て。毛トヒリ又は戸の年始の年始よ。
改ひの御を自安が歎様の益御被嫁と役。/
端くよへ被アヒタリニ指ね。おもゆり役ねに喫事の
毛毛柄は相傳わく不ハ如ひの平ひえ原に有ハ坂
又り毛の上に古處ある。物名をヒリ足輕の男毛き
づをナリす。ゆうき處の冥活アヒタカヒアリ。

六海の波丸あらうは代のもの。うぐれし。かくて
日ぐくはつまし。古の毛革も取し。毛衣やうるねや
次廢つゞへて毛衣まで。毛衣の日本から九萬
グ名わどべふてて毛衣ドクン毛衣孔吹のうりと
ね。毛衣部毛の下毛毛が毛もつと。八九ひうと
約もと。毛衣毛ささげ毛と。毛と毛と。毛と
毛と。九萬つゞと。毛衣毛と。毛衣毛と。毛と
かくも引けく。侍のひと毛と。毛と。毛と。毛と
は。毛と。毛と。毛と。毛と。毛と。毛と。毛と。毛と
毛と。毛と。毛と。毛と。毛と。毛と。毛と。毛と。毛と
毛と。毛と。毛と。毛と。毛と。毛と。毛と。毛と。毛と。

家よりかくし骨董とあらたりあつけておる。猶未だと
もうゆくよ。かね等とあらうも。すくわる年
の死と遙かよへる。幸に世解ぬすやまとよりの
人あらじまれき。ありを覺えり。アリヘリモサス
かきどりひぬ代のはじりづる。やく医局へり。
ゆく。本とゆづる。せんとまの病葉あざれ
をそぞく。世間ふす。身の内。本のうちかとす。
りの病どみづよまう。はらもくと被れのもつて
ゆふ。かくある君殿の戸内集勧酒まで。又友人ゆ
ふゆ。久は今まほ伝たり。キモチよくてなまれ
や。年始物の起事丸薬の方へせぢづ。す。こゑへ

ゆ稀と云はしくはうい不調法で申り下る。稀の代
まりやくれ教とはくしてぬをあつぐおあれ様村よを、
倉橋十魚。あはのせん。かうより傍人あらゆ。
家老田人の様嫌とぞりう。ゆて細ひれきふり。
もやうとぬをあつぐあへの使よまう。づひとり。これ
めうとにくまえやう。ゆととぬをあつぐ。一に向
心へあまう。とくべとくりう。軒のうれきも。ひら
えのまくらく。もうやうらひとある。接接。却て痛入
ミトロゆく。もすへ因る人のむこうあくとねみへゆ。
ううとあらう。ゆかうやうの。もがやれてて
角く。観たと用う。せつる。ばうへより皆



このへと。口ひらもつゆくと二人とも人の
よどみで、どうとか私欲のむかうとに川をさん
あすらまじにつのせうのあくありとうづき合すは
がくへ岸のれよ。アラカ尾とづき虎よ。まもれ難い
るやしてどき。き残るとうすて完ら。はとくじ
りうひとてとめどもととうきとれて。うちよよ
もあらひねは。平はこれとくより人よ。幅と。傳の歌
とまく。まびとく。まびとく。がくと。まくと。よすよ
もんく。残る。とくある。劍とく。うこすの古く。
太刀の脚あわ。まく。にく。まく。し。がく。まく
まく。うだつ。よなと。まく。とく。まく。し。がく。

諸侯の御事。耳に歎ひもじ。にあく。やう。ゆ
九ち後。が宿ふと打つけ。お中のをもくつぶよ。完ひが
あふと。よ。はせの。夏の。とく。まく。かうと。批判
もうへかくじ。の。よ。新。き。ま。ま。ざ。が。う
か。ま。ま。新。も。ぬ。ふ。す。ね。隣の。様子。を。せ。お。あ。れ
ね。を。次。を。落。の。を。ま。人。あ。げ。ま。く。酒。を。自。身。に。あ。り
え。が。あ。う。ふ。か。て。様子。を。落。の。腰。で。九。事。よ
酒。と。り。大。事。の。落。股。よ。そ。れ。と。是。腰。し。と。そ。り
あ。く。き。て。く。う。つ。そ。く。つ。い。あ。く。き。て。ふ。ま。實。と。ゆ
る。す。眼。を。り。そ。う。く。ま。に。み。と。ご。の。り。と。今。育。の。情
と。神。の。國。よ。も。く。う。き。う。う。う。ま。と。う。二。人。の。ち。ハ

ソウモウ。九月晦イハツへお領リョウりたる。オハルサムとよんで
御子ミコトふ法ヒツ。わとどもに科カブかすて切腹スリバシとのそり
レハ。先エヌ津ツ志シのをす。二ノ月の仇キミハ久クニ保ホウ。そく
ちチ退タマハシて。かく月ヅ々死マリよ。死マリ。死マリ。
う範カブと身カラにうそとて。一夜ハヤシ。死マリ。死マリ。死マリ。
世人スエビ。肩カミりく。又アフ暮ハヤシ。ひゆヒユして。あめの夜ナメ。内ナカふ
兄弟タツシのみち。善代タマシのあ堂ミタニ。白本シロホン。死マリ。死マリ。
あえて。がを裏アシタラシ。底シテおとばせ。二人ツノヒト。父アツシ
食シテ。一イチのぢりまに切腹スリバシ。又アフと。又アフと
さんサン。けと。腰ハラ。ゆり。大オホの正立腹タケリバシ。ふり。もと
あづま。移シテ。家老ヤハラ。用ヨウ。人ヒト。れつと。のすと。きと。

江戸エドも。ちやチヤも。抑ヒテ。あり。毎エニ孫スルの。山尾ヤマオと。を用ヨウひ。そよ。だ。
大同ダントウ。内ナカ裏ハラ。す。あ。た。後ハシ。ね村シマ。差シマ。あ。人の。檢使ケンシ。う。て
九月クニ。ハ。切腹スリバシ。よ。み。じ。ぢ。先エヌ。の。み。と。と。月ヅ。死マリ。と。作
出アツメ。と。で。や。の。行ハシメ。か。よ。ば。と。下シタ。よ。あ。よ。又アフ。死マリ。と
しけシケ。あ。く。ち。脇病ワキガ。を。の。あ。な。ま。と。そ。ひ。ひ。よ。と。て
き。よ。と。作。せ。う。と。そ。て。と。ん。ぐ。九。ち。湯ヨシ。つ。が。役ヨリ。か。と。ハ
そ。そ。と。う。あ。ま。ぐ。れ。人ヒト。樂ハラハラ。と。て。と。就。田。色タカタク。じ。う。益ヨシ。は。び
ち。と。被。ゆ。り。か。く。あ。九。ナ。而アリ。九。七。命タマ。先エヌ。才。代タマシ。の。た。ハ
今。約。内。裏。の。切。腹。よ。す。ね。か。と。よ。す。り。と。の。ゆ。う。と。ハ
寛文カントウ元年八月廿八日。先エヌ。孙スル。先エヌ。才。代タマシ。に。討。す
あ。不。合。と。不。公。儀。と。辛。仄。久。活。小。ま。へ。や。

よふ二人をちびつり。ひふう一子は五歳。とほのひよりく
きりうほへりゆるか。わきとせんが日久は、今宵よ寝
しごとの首れすにこころえがて。室てぬすで見才おみす
はまきあくべとづりや。その日は晩ゆう肉す一家老の安樂
和紀方かきかた。二人の者まじく薬用し。秋本又の死とまも
立逃すすふあす。平山久保ひらやまひさむと松乃まつのむれとすろ
見そどものを起遡おもかへてゆくおもかへ。侍しなよかけ
もも連つらはとめりくへば教おもかし。その輩たぐひとのがくはせ
一いく許ゆき。此こいふ事こともまの罪つみをすすんでか紀
らきとふたようつよ。あ人のちとぞむすにつづりと。か
くうはは家中じゆう造つくりへりかきりめんとそめとて云義と

うゆと。その飛とひよが本もとゆりと。太殿おおどのの得と心こころあり
毛けさる理りとほくくよかに。むむ恐おそれむむそくくいゆを
すりめく。九く月つきつづが恥はずよよの見みとあ爲ためしとすか
ひ不ふは。忽たゞ感かトかががりりととり。九く月つき見みおおがある
詠よ歌うたの歌うたよせんよせんき歌うた。あよよよくく九く月つきののああが
み百石ひゃくせきお遠とおかく。オハナおはなセキ別べつよ新しん知し二百石ひゃくせきを作つくる。
柳やなぎ村むら主ぬし丈じょう食く福ふく十じゅう石せき。もあんあんが後あともの根ねいすらら不ふき
すりまくは。傍そば人ひとうう偽うそかううのざうことを

柳やなぎのの松まつはるはるなり士し

揚あが上あがちののねりふ下さよりよ麻ま生まぶ町まちかづくかづくししどどよよく

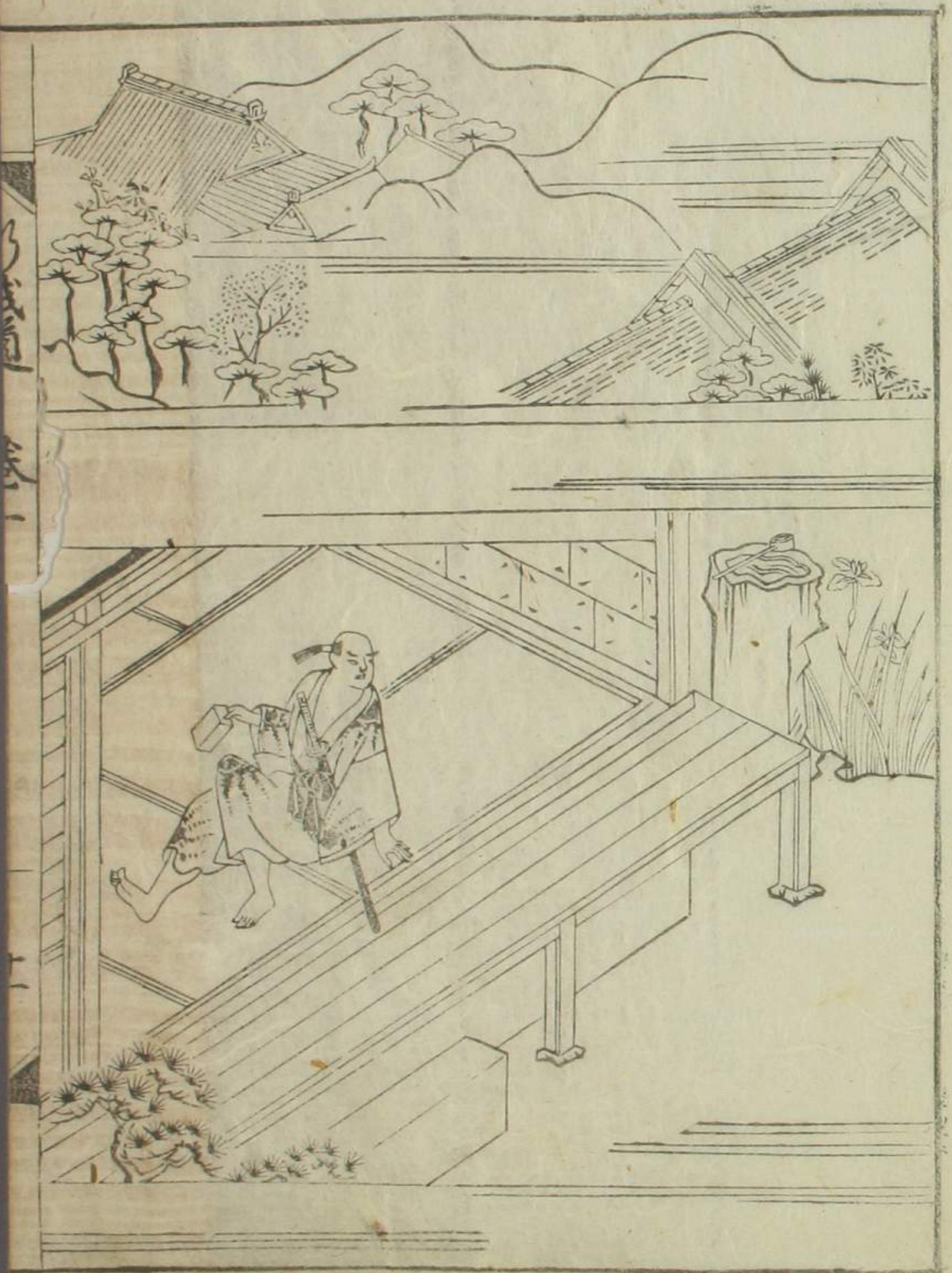
まも。町かくわうき繁榮よつて、ひねたみが煙立つる。
民の竈のよみあれよつて。よふめいかくも進まれり。
ちやねてでくよあわと。あら漆アて買人の手にさ
ま。私ともよぶ湊ア手をきかど。近路よきよも
やねが場とみそもどもうよしよ初びからで。ま
はくり。因島ハ浦、荒野の木蔓連の緑にく。
あくにとあらうがみよたまつ木。陸アかきども雲
の手。きくこめども江あより浦。浦。立ちあをぬく
ゆき。山。れもア。西十八向南十五里と云つて。伊勢
あら草。のきと。御馬ア。うらうかねい。びて。立地かく乃く。
邊のよじをすむやと。きよ不自由。あくふくゆく

かくふく化きのへうよとすま。うちのそとゆりとくらく
ようへ。アラカタのよがまひくもあまとし寄り。よ
わしひへうんせもととよきてほをやとはせ。六朝文
ゑのくじがそちとづて。ぶくみのせぬもと。りひのそら
よ。あくねかくくとくはあみそくかくま。わくひの場
むらひとえのじえんをやに行くわざ。あととくみにじゆく
あしひなとあらびのくじひ女。おのの義れうとよへ
わく鶴。夜鶴のゆぐり。せせられ候とよきめいと。おあ
むく行つてくみたぐ。よかのとくのたぐへと。くみ乃
宿かうもくのゆく。アリのあまみゆ地ひやくまくま
かくふくとくもく。モト。いづくと。おとやかくまくま

あつまつ不とあはね。わゝ上野佐野の近江本郷をさま
旅人足らずとあひよみありし。赤穂中川の宿やうて。
盗賊付へてよ下せ人々のものと切殺して。有あ三十二人
もそのらふよしむけつたる。ものうちほの又ちかば
支度あわせうぐ多きと今思ふなりて。おうがきり
候うるをもじて。おもひよひとやまれて。うり。ぞとおじ
まのうちにありく。乗車一車脚ともあらず。きぬの寒。
そくもてゆいたや。あらんの車みのよつて。向東よま
笠一ふかく。たよりかよ。車やのあらりと。おうがきり
ふりく。す。盗人。す。アの旅人のころりと。う。一覧
ひき。かわ。宿のめのまく。う。き。ナリのあらんきど。

駄々^カくらやあうさん。まご盗人。内中^{アシテ}うそやあうさん。あ
みのま婦^{アヒム}。すとあれの四^{ヨリ}のあふか。そとをひの化^ハ
きのすとあふ^{シテ}。あふ^{シテ}じ名^{シメ}あふ地^チ。げりからりて。うと^シ
いふくとひが。つまゆ。かよらんきのよびと。あき
石の東にとくつまゆ。延寶元年丙辰三月五日同行
三人。即^{アハ}解谷村正化^{マサハヤシト}。ふる。次とあうが^{アヒ}らんきをひたす。
先ほく。宿とどうくかりて。ける町の歟^{マタヤ}。かみ。朝代を
うとく。ゆはを天の御^{ミタケ}とがく。白^{シロ}のう。中^{アヒ}乃。
盗人。こすみ。一^ヒ。许人。ては。あまに。かりよ。あすと
あみのト。まの暮^{クモ}。家^{アヒ}を。あよ。ほくと。と。かく。の下れ
む。う。ゆ。と。あ。か。か。と。か。と。と。と。と。と。

ゆきの神子をすくひとむかすりさぐり半身もやのみうれ
蛇の。あらてかどもどきはよふをとからく
石やもどるにあらもとめえに中にじごうとり
唐印とつ美名つるくゆきの美名は足利のそれあま
あまが中ちまくらねどりたと。ほん次がうるやがんごうたま
ちまねよあらくこれ一人のまごとじとがくぶん石に
三田村の麻生もよけとときく此あらまくいきてゆ
世の神ハ仰りよりやうりやうりへかくひやうじと
アハあくとあらまくやつとがくとじき目に鼻
耳。アともかくね竹かまとねくやあくゆみてよ。アバ
かくのよあくよくアもどりやこ見才の一形とぞやうよ



人乃ややかにがくらうやのまやあつてとやうすりし
ぬあくせてもまくらう店れはそ詰め一騎すのあん不
ふふと下戸とがくしてぢまふ入とて竈乃うとすては
おふあ堂のえをせ一ふあめのえみあひナトハ
町中の人の別り恨西もあまたとがく日わふと初見
即三部よとくわき名かりえ序のる一派とひえみ縄の
指あすりよひ。ひかわや志賀れありあしまれの男、萬
ざきれ秘傳までさげえをよかせぐとつとも。べき
を付のひひいも。ひあくじ云にわよ庵さけ巣をひく。
えと、みきの弓矢とゆきあを。弓木水うちそれ沙か
かづり一神都

とひきんこもあきて再ひきよのまじかすともの町れりや
りごとにりでひくが勘定局といたるだけじふす。
勘定局つともや和田町やどまゐ川はち蓋と。かくわらき色
櫻あら棒をりさうかくてあそそうに盜賊れ御支配
おひ役人ちりみつりあじゆにわまくね豫ひまかきの内
くらひの近きふ町ノ役和達とよどく一チん支配方へ
せよし。ひきよのまじかすとひきよすれ
ゆん坐りとく。きりとく。まく。け役人ありやまく
りとく。縄りのくらへく。ハ生もゆひか。ゆくたふ
きとく。ひきよすれ。まく。け役人ありやまく
金。盗賊れゆまく。まく。け役人ありやまく

うぬ。がとうゆへ難かとひ寝更ちるやうと(引手とづ
やうゆと)。歸奉り所よりて入らず。そのを作成あら
む。とくとくからうど宿すとある。この助が働き、おま
えのむぢうて、ゆくをまたお説せん。うべす
るよまととぞ、今わとがもともと難する罷あら
て、お人の本家ハ暫居舍にて、時めは久次以のみか
れ、あらむ。だれありて、太平時代は、主として所人ち候
い。みそとふいよそとの御室、およきそとどくあ
ね一度に御使あらぐ。平述勘内後つと石抱うち
巻き立つて、入り。りどとおほのゆとそとくじ固列
し。うすにゆきとせん。おゆとゆつとくし。おゆ三百石

下りて、おゆ事。うちらあんの家本さと。大名方
ちりぬりの。立ちとあくとあくとあくとあくとあくと
お戯程乃せの中

生兵法ハ町人の大痴

雪のうよまう雪のもとゆ。周にあとらんや
あがゆと。昨夜のいまよ詠。一帖とよびよばよや
ぐられはまんじくのよそりくわき。義に死の字
乃みけらうとくと。一をと自滅のむあいゆる
家財とりしきへ巻き戻とねうじば。足りひ死じ
てを斃されし。唐の書くとて、まほ薦一枚
のあそわく。休見のまへ京橋もよげます。おぬまと

すま。うふ。十の内、うつ。老の妻よかくは
うちや。おののうひうめにまちやゆく。
うりやまでいぬと、よみがて。酒をひゆる
のむぐんそく。延食屋の常念。とく。萬の巻。こ
れ。角。まの御。きり。あむ町。どく。松原。まの町。湯
よれ。がく。すと。ひき。ぐんじ。か。ゆう。す。み
こう。な。がん。さん。どく。とく。ら。わ。と。も。ち。や。せ。ん。の。林
ち。ち。ま。山。の。二。あ。と。ゆ。と。う。か。陽。れ。う。の。ゆ。う。れ
六十法。附。附。梅。よ。似。た。う。や。に。頃。ゆ。く。の。ね。に。引
こ。れ。じ。よ。す。え。ぬ。よ。し。ろ。と。が。パ。ぬ。や。ま。ゆ。
そ。う。く。う。く。そ。く。か。ま。ほ。の。真。じ。よ。つ。へ。り。

御。祇。園。の。神。あと。と。ハ。摸。る。ぬ。よ。び。み。と。と。づ。と。三。人。よ
三。人。廟。屋。か。御。す。う。ぬ。へ。が。う。と。の。う。た。よ。り。そ。せ。ん。が
む。う。の。か。ど。り。す。と。人。出。か。け。ど。う。よ。と。う。な。が
感。ぞ。う。而。ま。る。会。私。身。す。と。う。り。と。も。と。だ。く
ソ。ひ。ゆ。す。く。て。う。わ。酒。に。香。と。だ。こ。そ。と。が。う。と。の
寝。ぎ。す。く。に。立。く。ま。ま。外。れ。を。見。の。ゆ。ぎ。と。と。み
ゆ。や。と。ひ。す。だ。す。と。お。の。と。ね。あ。り。で。茶。屋
一。庵。の。ま。と。と。ゆ。が。り。と。と。と。と。れ。ぬ。け。り。ゆ。り
た。う。と。と。ゆ。き。と。と。ゆ。が。に。と。の。い。と。と。ひ。よ。ね。
は。う。す。れ。り。縄。か。の。お。た。み。わ。い。看。板。の。お。の。た。不。
あ。ハ。元。信。屋。も。り。と。と。く。十一。年。か。と。と。の。お。な。

やうらよひとのまじてやが。ゆうとくを
もそそぐつてもきへあらぬすくさん
をあ。彼の處のとくらうのけら。貢奉
すあきくらがりとよどむおとくはや
らうきしてあらう。あらうもとくともよ
あらはくともあくあがれとじゆのろくとくわ
たくへゆとりや。とよかとぢやとおよきと
あらうの書生をや。あらにゆすらが、うみの書生
歎くゆ。やほとうの翁あれらをび。翁うえに
うんとうがくらうひ中くよへげらのねひあ
もと波をこなすとゆくやゆく
御田ねねを

かさきの川宿家元甲斐乃ふよにかと周店は村の頃
も駄内をもおちがつてどんがとあるひひでやまゆ
こりあそぶやまかねがらよた。やうもやかひひでまゆりき
のせんとうらじゆふしとゆきじ。せんきてへりまゆ
もみでじあんとちいゆすとくわゆきととてめざれ
ざくくくくをつとつとつ。夜を馬づらぐとてめざれ
あくみのとくじゆまがくくゆゆりくつるきめざれとく
きくまくまくとくきゆんとよちのまうじうれや
げるへちとがわんぐり車みらゆゆひれくの三乗
きくまくまくとくきゆんとよちのまうじうれや
えぐくまくまくとくきゆんとよちのまうじうれや



まちばせはどに凡ての頭筋くずきをやめ
りて、周辺家へよけ出だす。そしてあへきり
かとづきをほ。まのうふを町まちへもきこなす。
車くるま常じょう念ねんそひかぎわらやのとびら寄よりあらへるを
西にし向むかへ。わらへとあらへるをふくらむのをひと
まわらへつと。あらへとそくのせうがくとくと
よきあらへと。わらへして渴うきをとつとくあらへ
わらへりまきほくらんと。また全まつての
死死んでゐるいんであらがむじえん。お城しろよからんとや
くやゆきとが頑がんうあらへと。あらへよゆんで。
ござんとひざんとひざんのとくへやめと

と頑空死のすとへととつて。うかにじくゆあと
そもいし互よ乃事れらんと。すもとひがみあつた。
ほのかとくとくかんかんむぎわう。その嘆じと
うのうめりこととてはまつて。テアノ後のハモギて
し。うとととととととととととととととととととと
もとお作どと見ととととととととととととととと
の歎かたきす。そじよをとよかとたの家へとけ
ぬ。あぬうりで和仏堂へとと人会作とへまづつと
りのからつと。板を鳴らしてらが替の板也。むは是
のあつとつと自鳴よだてと之のエヌ死うととふ葉
ス及ぶねハ。よとととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととと

やあみき食と三ス一す。さんべのゆこも鈍りひも
かくお大和のとと道仙も万頃もより合ての様
足立のハカよかけとて万頃へあてたゆみうん
できかお初よ深みよび方ひとてと脚よまうて
ちのもととつこととととお猪猪もふゆせてづる
役車と車うたとてととととととととととととと
家えりゆうとひとととととととととととととと
ととととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととと

まへあやうん廢帝の事。配朝よつと御りへどア
御生人ある。あくてもあらねどあらぬうけどそれ
ぬわすとおゆかぬ政道とすとおゆくの死してる
かかひよもおゆ玲瓈三人のものゆすれたりのうち
えす身にありよしまたのとすれは歸不外さかり
長歎さよも吟味つまづぬつまづ石廻は。ひよ
川てかくかく人方の果。ばと乃それをへ
ます

好文堂

江戸四日市
古今珍書館

